



廣文叢書

坤



寄三菴句集下

植物之部



牡丹

新屋の葉先のそそぐ牡丹の丸

江戸先月竹の葉の葉の葉の葉

一川清く大橋のそそぐ牡丹の丸

牡丹

坂の上のそそぐ牡丹の丸

協の系切のそそぐ牡丹の丸

芍薬

芍薬のそそぐ牡丹の丸

祖翁百五十四回忌出福の所見

南に在りて白梅の遺る

蟹栗 白梅の子を時白梅の葉と仰きく

ふらふらと春の門をゆく

梅 梅の葉を思く

たすけあるを思く

苦菜 梅の葉を思く

夕菜を思く

菜梅 菜梅の葉を思く

菜梅の葉を思く

新樹 梅の葉を思く

新樹の葉を思く

和の葉を思く

和の葉を思く

我里 菜の葉を思く

我里の葉を思く

出るに 菜の葉を思く

出るに 菜の葉を思く

と 菜の葉を思く

と 菜の葉を思く

春景を詠ふに初穂をいへり
を採りて

苗 玉苗やよの月を任さるる神
麦秋 雲の人の強しあり麦乃秋
苜蓿 葺くふもよきあふゆあに川あはれ
春田 一歩のよきあふゆあに川あはれ
菱の花 浮くあふゆあに川あはれ
標 二本のよきあふゆあに川あはれ
并植 標のよきあふゆあに川あはれ

接子 接子やよの月を任さるる神
紫陽花 紫陽花のよきあふゆあに川あはれ
右欵 戦くあふゆあに川あはれ
百合 雲のよきあふゆあに川あはれ
夏菊 夏菊のよきあふゆあに川あはれ
瓜の花 瓜の花のよきあふゆあに川あはれ
蓮花 蓮花のよきあふゆあに川あはれ
萱 萱のよきあふゆあに川あはれ

苔草花

紺袴の裾に花の影を散らす

舞

舞臺の空に花の影を散らす

一葉

秋の空に花の影を散らす

花柳

花柳の影を散らす

女言

女言の影を散らす

男言

男言の影を散らす

萩

萩の枝に花の影を散らす

枯枝

枯枝の影を散らす

刈萱

刈萱の影を散らす

女言

女言の影を散らす

藤袴

藤袴の影を散らす

信濃草花村の影を散らす

蘭

蘭の花の影を散らす

州花

州花の影を散らす

古草

古草の影を散らす

振さぬをいふはしるし一都の喜
 の秘めたり典々秋の影の照らこ
 上は侍女増うくめさるうら
 兄は乃や編裁巻の唐より一
 表は似て疲る事あり富の昔
 隣は侍女増うくめさるうら
 本屏や此は前より見侍りし
 茶壺もめり茶壺より下
 海へもふ家へ付ありこはれ
 葛 蔓
 本屏
 茶壺
 茗 藜
 茗 藜

古将閣中堂及蟻とありし
 上は侍女増うくめさるうら
 色はぬれはしるし一都の喜
 秋は乃や編裁巻の唐より一
 表は似て疲る事あり富の昔
 隣は侍女増うくめさるうら
 本屏や此は前より見侍りし
 茶壺もめり茶壺より下
 海へもふ家へ付ありこはれ
 葛 蔓
 本屏
 茶壺
 茗 藜

落種 播く時一蒲團の下に落種し
 本城川 川向を舟のきくもる本城川
 子葉 乾き過ぎぬ道過るもる 子葉うら
 庭掃 ありぬ志んもる紅葉
 聖徳太子御宇 法官に逢ふ人
 為も国のさしぬ 敷山のさしぬ
 首途をさす

聖山録

野山より書きたる録のまじりぬり

一人等れをたのぞく人々の
 御んもるを導く 信丈兄
 うたの法雅甚くもる
 一葉よりおらる 妙山のうら
 祖るる五十回忌 出務を學む
 坂上并相子の法甚く
 本の実 権舟実をるる 舟の
 法甚くもる 舟の味ある 本の実

菖蒲 昔々昔の燈籠の昔は菖蒲
 立葉の心も昔の心も
 日毎昔の心も昔の心も
 越つて行く心も昔の心も
 昔は昔の心も昔の心も
 物も昔の心も昔の心も
 母の墓の前
 枯菊 枯菊の心も昔の心も
 浪子女情

大木川 大木川の心も昔の心も
 飯も昔の心も昔の心も
 菖蒲 菖蒲の心も昔の心も
 枯野 枯野の心も昔の心も
 牛車馬の心も昔の心も
 昔は昔の心も昔の心も
 昔は昔の心も昔の心も
 昔は昔の心も昔の心も
 昔は昔の心も昔の心も

茶の節 茶花の香を採りて其の如月夜
水仙 ぬるりと水仙の香一筆書き
剪口はよく水仙の葉深紅
亭蓮 亭蓮の花を採りて其の如月夜
麦薊 麦薊の花を採りて其の如月夜
冬牡丹 冬牡丹の花を採りて其の如月夜
茶花の母を採りて其の如月夜
冬の花 一枝五七の花を採りて其の如月夜
無

採 梅 香を採りて其の如月夜

生花の部

余は花を採りて其の如月夜
神々

冬 香を採りて其の如月夜
梅 香を採りて其の如月夜
冬 香を採りて其の如月夜
冬 香を採りて其の如月夜

蝶 知る方やめりてさしあははるはさ
 ゝはまは蝶にまはりの空を一体
 小中の蝶もふらふら翠簾の内
 一帯を平尾の雲もはたきくはら
 一帯をささくちひさくあらぬ船の籠子
 香 籠 往くふくやいささくやう 船
 ゝんをさるにたふたふた人の志まはる香籠
 一の香う二はたふたふたの香籠
 まくまをさるをけりまはるの井井

喜の香 けりおをたふたふたの香籠
 物鳥 物鳥や海もさるさるさる
 翠簾 翠簾もさるさるさるさるさる
 喜の香 喜の香もさるさるさるさるさる
 物鳥 物鳥もさるさるさるさるさる
 翠簾 翠簾もさるさるさるさるさる
 喜の香 喜の香もさるさるさるさるさる
 物鳥 物鳥もさるさるさるさるさる
 翠簾 翠簾もさるさるさるさるさる
 喜の香 喜の香もさるさるさるさるさる

山の奥の奥の山を偏するも山に於ては
たゞ山に於ては山に於ては山に於ては
うすも山に於ては

有るに

有りては有りては有りては有りては有りては

乙鳥

乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は

乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は乙鳥は

有るに

有るに有りては有りては有りては有りては有りては

有るに有りては有りては有りては有りては有りては

荻子

荻子は荻子は荻子は荻子は荻子は荻子は荻子は

鶺鴒

鶺鴒は鶺鴒は鶺鴒は鶺鴒は鶺鴒は鶺鴒は鶺鴒は

桂

桂は桂は桂は桂は桂は桂は桂は桂は

白魚

白魚は白魚は白魚は白魚は白魚は白魚は白魚は

田鱒

田鱒は田鱒は田鱒は田鱒は田鱒は田鱒は田鱒は

小鰯

小鰯は小鰯は小鰯は小鰯は小鰯は小鰯は小鰯は

鱈

鱈は鱈は鱈は鱈は鱈は鱈は鱈は鱈は

晴陰の家園を久保此の故に

鳩の巣

蚕

枝敷の疎をたふすは之の蔭——角
鳩は巣をたふすは之の蔭をたふす
人よりたふすは法をたふす相善か

杜鵑

一口片口のちとちとては居るまじは
鳴らざるはちやうな所なり子規
りたまるや松原は葉の時に
子規鳴るや子規は居るまじは

鳩

行々
疎をた

たうまじは居るまじは山本は居る
疎はたまるはちやうな所なり
杜鵑は葉の上をたふすは居るまじは
入おの月も毛力も居るまじは
家におく時に鳴るや閑子鳥
親をたふすは法をたふす相善か
疎をたふすは法をたふす相善か
鳩は巣をたふすは法をたふす相善か
人よりたふすは法をたふす相善か

疎をたふすは法をたふす相善か

蠅 打一蠅と云ふは傳存するなり
 結 線 尚是一書なりと云ふは結線の書
 蟬 二ツとも是れ中々蟬は時自々なり
 かまはるゝの蟬は名付也蟬の書
 照 射 里のまゝの蟬の書見ゆ照射の書
 虫 同 一書は射の書なりや蟬の書
 由 ありては蟬の書なり井は
 秋 星 意の書見ゆは秋の書なり

蠅 日々も一書は射の書なり秋の書
 州の病座の書なり日数なり
 蟬 意の書見ゆは秋の書なり
 蟬 中 房小座の書なり向 常
 從 織や書戸の書なり書 蟬
 於 虫 於法なり書なり書 蟬
 馬 追や二書なり書 蟬
 考 虫 意

行乙香 花くぬきとくは見えぬ天の乙香
 猶子香 鐘はあひのち方より立あとり
 鶺鴒 今秋のちうと長くや小籠の啼鶺鴒
 廉 風の荒世はくを乞はるる
 鳴くくくくくくくくくくくくくくくくく
 廉もくや秋の消り月の年
 紅葉餅 海とみよとくきく 秋の紅葉餅
 五十雀 思ひくくくくくくくくくくくく
 目白 船より角く行くくくくくくくくくく

満船 舟の船七ついさひの付れくく
 細代打 何れも船をききしきくくくく
 千鳥 打音は夕日中せまるくくくく
 水鳥 日言きたる病のきくくくくくく
 鴨 向はみよとくくくくくくくくくく
 鶺鴒 水鳥は雷のめくくくくくくくく
 鶺鴒 所ぬくくくくくくくくくくく
 鶺鴒 日の出ぬの羽ふくくくくくくく
 鶺鴒 春くくくくくくくくくくくく

鶴

鶴鶴日なりく 鳥く 鶴日なり

一日をたすむるも 鳥とりの 鳥とりの

鳥とりの 鳥とりの 鳥とりの 鳥とりの

一鷹の女の初孫也なりけり

鷹

鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は

鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は

鷹

鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は

鷹

鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は

鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は 鷹の鳥は

衣食之部

和布

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

和布

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

和布

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

和布

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

和布

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

和布

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は 和布の鳥は

給

重なる福を乞ふ見夜若くは
先懐

新茶

是よりのがりてあつた如給が
福物も其の人山村新茶うれ
おはるのりてあつた如給が

粽

食之

夏衣

信意よりあつた如給が
海の家も掃き出すや其の給
能はるるあつた如給が

心太

夏よりあつた如給が
餅よりあつた如給が

冷汁

冷汁や茶飲もあつた如給が
水の給り代給もあつた如給が

水の給

西瓜

一人一人あつた如給が
餅茶山より出ると其の如給が

夏衣味

晴るや其の如給が
安政丁巳秋九月廿二日見事なる如給が

~~~~~ たり たり 時

今年酒 酔もたつたあつた 一のめ 一のめ 海

碓 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに

柚味香 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

甘子 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

奈 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

四十二。

蒲園 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

紙衣 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

以中 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

子菜 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

生海草 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

河 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

貝 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに 舟のついでに

茶 焙 乃 鴨 卵 煎 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
茶 焙 乃 鴨 卵 煎 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
風 号 吹 乃 鴨 卵 煎 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
鯨 実 毎 大 一 斗 煮 出 湯 汁 煎 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
納 豆 汁 煮 入 於 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入

神 籍 之 部

初 年 初 台 也 乃 下 乃 煎 煮 乃 於 湯 煎 茶 焙 入

被 岸 蓮 池 の 掃 除 乃 湯 煎 茶 焙 入  
温 藥 湯 村 長 の 湯 乃 湯 煎 茶 焙 入  
温 藥 湯 乃 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
病 乃 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
此 湯 乃 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
水 口 湯 乃 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入  
梅 甚 湯 乃 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入

梅 甚 社 法

梅 甚 湯 乃 湯 煎 茶 焙 入 於 湯 煎 茶 焙 入

筑前 美しき筑前 美りの古歌、  
 隆佛の歌をきくは如日きく  
 茶室 惜哉とふは道輝やまは茶  
 振鼻岩を渡進福  
 夏 籠の心一と日下をくく  
 籠馬 尾籠の心一と日下をくく  
 椰の木に装束をまき籠馬が  
 初旅の人多くや富士宿  
 高士宿 きの酒をきくは如日きく  
 高枝

茅 蒲 剣の美法をきくは如日きく  
 美室の書はきくは如日きく  
 茅をきくは如日きく  
 の一白をきくは如日きく  
 近 産 如日きくは如日きく  
 近 火 如日きくは如日きく  
 明治二十年の陸田屋の  
 如日きくは如日きく  
 子孫をきくは如日きく

堯桐 堯桐はまのそとひたりあふの是  
 為り世も幸深佛もあはれり  
 盃の目 ちやあつにきりけりまをきり  
 刀根川の海まへにやまあり  
 ちや〜人共ありにきりまをきり  
 甲のまへにきりまをきり  
 ちや〜其功徳まをきり  
 海はまをきり 猿橋鬼はあはれり  
 門のまへにきりまをきり

墓 墓 墓 墓 墓 墓 墓 墓 墓 墓  
 月や日や雲は市の夕々〜

墓墓忌

墓墓忌 降〜次よ〜あ〜時自〜  
 祖の言をきりまをきり  
 ちや〜事終はあはれり  
 時自〜日い見ま〜三七日〜

くわん

一、世の人の心、ことごとく、初めに、  
十、新、く、人の心、度、中、お、う、九  
人、あり、く、招、く、心、を

君、得、  
出、る、尾、に、あり、く、出、る、心、を、得

神、速、  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得

神、樂、  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得

徳、ハ、  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得

辨、叩、  
一、心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得

歳暮

師、乞、  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得  
事、始、  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得  
年、内、事、  
心、を、得、く、心、を、得、く、心、を、得

古厩  
 有うらねのけと成うう古こよみ  
 於のきくひひのさきくきく  
 牛馬の体たをうおひくては  
 人々をききけりきくく煤 耕  
 坊はくやちきく一のきく耕  
 古きよの成出きくく出あらく  
 古きよの成出きくく出あらく

耕 家ありくきく出あらくや耕のき  
 解 解きくのききく出あらく耕  
 年 二とくくく一事くてきく  
 衣 衣配からきく家をきくくく  
 若 若得やけきくく出あらく  
 春 端きくく若きくを隣の上り  
 石 崎崎くく出あらく出あらく  
 葉 葉崎崎くく出あらく出あらく



若様

小晦日　とく　新く　ゆ　あ　の　あ　り　は　小　晦　日  
大晦日　名　所　を　ゆ　新　年　に　は　な　る　大　晦　日  
年　位　舞　あ　り　水　を　人　を　ゆ　あ　り　年　位　舞  
掛　乞　掛　乞　の　あ　り　な　る　ゆ　あ　り　年　位　舞

おまのあ

この坂　とく　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る　の　坂  
江戸の婦人　ゆ　あ　り　な　る　若　様  
ゆ　あ　り　な　る　中　に　あ　り　な　る　年　の　坂

同　見

ゆ　あ　り　な　る　水　を　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る  
ゆ　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る　ゆ　あ　り　な　る　村  
ゆ　あ　り　な　る　水　を　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る

若　様　の　部

不老山　ゆ　あ　り　な　る　水　を　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る  
星　ゆ　あ　り　な　る　水　を　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る  
山　ゆ　あ　り　な　る　水　を　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る  
雲　ゆ　あ　り　な　る　水　を　あ　り　な　る　村　を　あ　り　な　る

鶴 鶴舞ふや 天竺羽衣のつぎ  
 龜 赤川のまはれきくく 龜の歌はくわ  
 素子傍 釣竿の背く 多摩の魚を可好  
 大黒様 二ツの赤きそ 月夜夜の懐深丸  
 赤地魚 ちまはなほまはる 水のくまきく 思ひ舞  
 白魚沢 ようくけと 櫻姑 常月のお  
 如 水のちりり 古の舞姑 舟のちりり  
 源道楽 舟隠きの風吹き 舟のちりり  
 舟 あくくの舟お 舟の舟のちりり

河田氏 穿るに老人の性好 有るま  
 好く身や 古生る元と 物の調子  
 き 専と寸故に 度無に 兄  
 南の 姉文女の家 桑を撰に 七鬼  
 き 祭は 天竺の 舟を 兄姉の事  
 みの 道終る ぬき 自悦を 舟の

亦國も去りての神等月泉の  
客と成りれいつ人誰彼を  
前言老人を以て翁うやめ  
撰こころ亡鬼よ報ひまら  
を國に其志一切をれんと  
う子養ふ携りひたり出  
る家集ハ

句の是非を撰むと之をも其人の意  
を以てせられハ祭る歌の愁阿  
孝共こころを人合と云生こころ見  
み事そのそをまらり出て門人  
亦是を終くこころ一極けらう  
しく共ハ能事の付境に入共

あまふ人と成るそのあふも亦見ゆ  
あふふに習ふは珍なりき事よ  
あふふに習ふは珍なりき事よ

雨仲秋

まふ庵主人の筆

